

身近に眠っていた研究資料群

—角筆文献の発見と新分野の開拓—

文学部 小林芳規

新分野開拓の条件

古文献を対象とする研究における、新しい分野を開拓する条件として、三つの場合がある。

第一は、新しい文献群を発見した場合である。“新しい”といっても、その文献の撰述者や所蔵者にとっては決して新しいとはいえないが、新しい価値観を持った研究者が、その研究に有効として、新たに自らの視野に入れた時、“発見”として取りざたされるわけである。

第二は、文献自身は研究者の目にふれて来たものであるが、“研究上の新しい視点”を獲得したことによって、旧来の文献群が新しい研究対象となって再認識された場合である。

第三の場合、これがここで取り上げようとする話題である。それは、第二の場合に似て、文献自身は既に研究者の目にふれていたものであるが、“文献”を成立させている筆記方法が異なっていたために、古文献研究者のすべてから見逃されていたものである。

凹み文字の文献群

古文献といえば、和紙に毛筆で文字を黒々と書いた文書を、誰でも考える。確かに、これが古文献の主要なものである。しかし、それだけでなく、それとは別に、和紙を押し凹

ませて文字を書いた文献群が、最近発見されたのである。それは、墨を使わずに、凹みであるから、視覚に訴えることが弱く、目立ちにくく。漫然と見たのでは、単なる白紙と映ってしまう。そのうえ、“古代の文字は毛筆で水茎の迹も黒々と書く”という“常識”が、凹みの文字を見えなくする。こうして、今まで古文献の研究者から見逃されて来たのである。

この文献群は、第一の場合のような、“物”としての書物そのものが発見されたわけではなく、第二の場合のような、研究者の頭の中で作り出された視点によって再認識されたものでもない。そこに文字があるのに、身体的な目が知覚しなかっただけである。

角筆文献の発見

この、紙を凹ませて文字などを書いた文献を「角筆文献」と呼ぶ。角筆文献の第一号が見つかったのは、昭和36年である。平安時代の古訓点本を調査している間に、偶然に見つかったものである。それから28年間に、平成元年10月現在で、日本全国の古寺社などから、277点の文献が発見されている。

紙本で最も古いのは、奈良時代の正倉院文書で、その紙背の白紙部分に凹み文字の書き入れられたものである。最も新しいのは、江

戸時代末の安政7年（1860）に『仏遺教経』という経巻の白紙部分に紙面を凹ませて「二月十五日」などの文字や仮名を書き入れたものである。この間、平安時代から室町時代の各時代の文献からも角筆の文字が見出されている。

紙本だけではなく、上代の木簡にも凹みの文字は見出され、藤原宮址出土木簡や平城宮址出土木簡にも存する。

さかのぼって、中国大陸の二千年前の、漢代の木簡にも、板面を凹ませて文字等を書き入れたことを、先年の現地調査で確認し、その後も中国の木簡学者から発見の知らせが届いている。唐代の壁画の下絵にも凹刻線が使われており、それがわが国の法隆寺金堂壁画（焼失）を始め、平安時代以降の仏画の下絵の方法に通ずることも分かって来た。

筆記具としての角筆の出現
凹みの文字を書くのに使われた筆記具が、昨年、広島県三原市の御調八幡宮という由緒ある神社の一切経蔵に納めた古経函の中から見つけられた。木製の角筆がこれである。

長さが24.6cm（唐小尺の一尺に近い）で、硬い柘植のような一本で造られたこの古物は、一見して小筆に似るが先端部に毛が無く、先是尖った感じで外見は万年筆の先のようである。実体顕微鏡で見ると、一方にゆがんで見えた先端は、実は材が割れてブラシ状を呈し、その割れた材のすき間に繊維が何本か突きさっていた（表紙写真はその先端部と繊維。中田政司氏撮影）。

理学部植物形態学の田中隆莊教授（現、学

長）の教示と、同教室の中田政司氏の協力によって、重大なことが分かった。すなわち、先端の下部面の摩耗した状態、木目に細かく入ったひび状の割れ方、材のすき間に突きささった繊維が古代紙の楮紙・雁皮紙の繊維と見られることから、この木製の遺物が筆記具として、和紙を凹ませて文字を書いたものであることが分かったのである。

広島県下から大量の角筆文献を発見

御調八幡宮の古経蔵からは、この角筆で書いたらしい絵巻や、平安時代の古写経も発見された。

同じ三原市の市立図書館の書庫からは、今春の調査で、42点、計191冊の角筆文献が発見された。江戸時代初期から後期にかけての板本や写本である。その行間や欄外の白紙部分に、角筆による凹みの文字が書き込まれている。これらの書物は、三原在の儒家や文人や僧侶等が残したもので、昭和になって、その子孫が同図書館に寄贈した。

その中には、江戸時代初期の儒学者の山崎闇斎の弟子で、三原で薬屋を営んでいた樋崎正員（1620—1696）の書物があり、多量の角筆の書き入れがある。その言葉には、彼の日常の発音や語りが見られ、当時の三原の言語がうかがわえて、今学界で求められている方言史の資料が得られる。

比治山女子短期大学の図書館からは、尾道の天寧寺において江戸時代寛文13年（1673）に角筆で書き入れた文献も発見された。また、比婆郡東城町の正安寺からも角筆文献が見つかっている。

広島大学文学部に眠っていた角筆文献群

実は、文学部からも角筆文献が発見され始めた。この夏休みに、まず中国語学中国文学研究室の蔵書を調査したところ、『三体詩』(寛永二十年板)など6点、43冊の角筆文献が見つかった。次いで、中国哲学研究室からも、『孟子古義』(享保五年板)など4点、19冊の角筆文献が見つかった。恥ずかしながら、国語学国文学研究室の私の部屋の慶長古活字版からも見つかった。目下、調査途中である。恐らく他の研究室からも見つかるであろう。中央図書館を始め、各分館、関係学部の古文献の徹底的な調査の必要を痛感している。

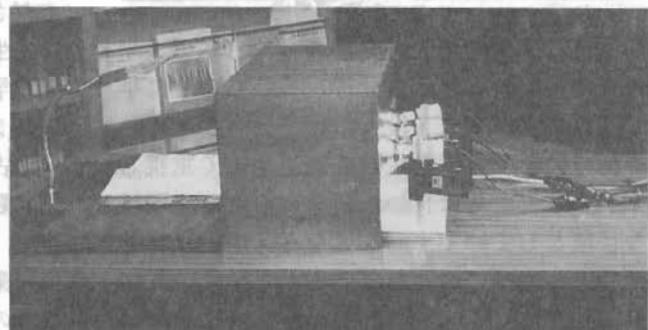
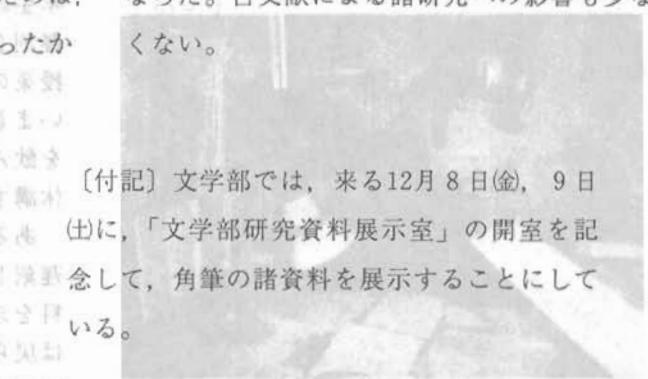
理学部の協力で「角筆スコープ」を開発

広島文理科大学以来の蔵書の中に、角筆文献が有りながら、今まで気づかなかったのは、凹みの文字という、特異な筆記方法だったか

らである。それだけに肉眼による調査では、天候や部屋の採光に左右されて、困難が大きかった。このたび、理学部放電物理学研究室の吉沢康和教授が堀口隆良講師とともに、角筆の凹み文字を読み易くする装置を開発作製して下さった。「角筆スコープ(角筆浮映投光器)」と名づけられた。紙の凹みの角度を調べ、多くの電球で実験を重ねて、黄色投光器三つと偏光板二枚、拡大鏡を組み合わせたものである(下の写真)。またも理学部のお世話になった。学際的協力の有難さが身に染みる。

折あたかも、三原市で全国初の「角筆展」が開かれることになり、早速6台が持込まれて披露され、その威力が發揮された。

角筆文献の飛躍的発見への期待が大きくなったり。古文献による諸研究への影響も少なくない。



角筆スコープ(右)と角筆スコープで浮映した凹み文字(文学部国語学国文学研究室蔵本)(左)